感情規則と三者関係の認知的斉合性を用いた二重拘束の形式的記述

野村 竜也
阪南大学 経営情報学部
〒 580–8502 大阪府松原市天美東 5–4–33
TEL: 0723–32–1224, FAX: 0723–36–2633
E–mail: `nomura@hannan-u.ac.jp`, URL: `http://www.hannan-u.ac.jp/~nomura/`

概　要

本稿では、二重拘束が思弁的概念定義に留まっていることを省察し、改めて社会心理学的・社会学的モデルの観点から再構築することにより、その源であるサイバネティクスに立ち返って曖昧性を低減したシステムモデルを提供し、家族システム論において新たな含意を得ることを目的としている。

そのために、二重拘束を関係システムにおけるポジティブ・ネガティブのフィードバックの安定状態として捉える長谷のアプローチ、および Hochschild の感情規則論を基に二重拘束を感情のギャップとして捉える山田の示唆を、社会心理学の三者関係における認知的斉合性の理論を用いて形式的に表現する。

1　はじめに

二重拘束仮説 [1, 17, 16] は現在においても家族療法・家族システム理論の根幹であるが、提唱された 50 年代以降の理論面での発展の無さに対する Ciompi の指摘 [2] や分裂病の病因としての経験的証拠の乏しさに対する指摘[1]、および本来 type theory という数学基礎論とサイバネティクスという理工学的システム理論に出自を持ちながらその定義は思弁的なものに留まっていることを省察すれば、科学的概念として十分に確立されているとは言えない。社会構成主義的立場にせよ実証主義的立場にせよ、主幹概念としての二重拘束を曖昧性を低減した形で再定式化することは、理工学的システム理論と家族システム理論の双方の対話による発展の上で必要と考えられる (この点に関係する社会科学における概念の曖昧さの悪影響については [15] を参照)。また、社会学者の高坂は、人間や社会に関連する現象の曖昧性を認めながらも、それを扱う科学的概念は曖昧であってはならないと主張し、概念の形式化の目的・特徴として

- 概念の明確化・一般化の手段の提供
- 現象の正確な表現
- 現象の一般的説明の組織的研究手段の提供

を挙げている [19] [2]

本研究では、二重拘束概念の明確化を目的とし、その一試みとして、社会学におけるサイバネティクスの観点から二重拘束のモデルを考察した長谷のアプローチ [23] と、感情社会学における Hochschild の感情規則論 [8] の観点から二重拘束を捉えた山田の示唆 [22] を取り上げ、社会心理学における三者関係の認知的斉合性の理論 [6, 12] に基づいた二重拘束の形式的表現を提案する。

2　社会学的観点からの二重拘束

本章では、社会学の領域から二重拘束に関係する理論を概観する。

2.1　ポジティブとネガティブフィードバックの均衡としての二重拘束

社会学者の長谷は、従来の二重拘束の解釈はメッセージの論理的パラドックス性をあまりに重視し過ぎ、病者の世界観の歪みという個人の内面問題が強調されているため、コミュニケーションや関係性の問題がなおざりにされる可能性があると指摘している。その上で、二重拘束の加害者と被害者が抜き差しならない関係にあることに重点を置き、サイバネティクスのネガティブ・フィードバックとポジティブ・フィードバックの

---

[1] Koopmans による広範なレビュー [10] が存在。

[2] 高坂は数理社会学者であり、概念の形式化の手法としては数学的モデルによる定式化を想定しているが、厳密な数学モデルに限定せずとも、後述する認知的斉合性の理論における単純な幾何学的デルなども概念の明確化・一般化に大いに寄与している。

両概念を導入した二重拘束のシステムモデルを提案している [23]。

長谷は、二重拘束の構成要素のうちの二点、矛盾状況からの撤退の禁止と、パラドキシカルな行動が相手のパラドキシカルな行動を誘発する循環運動の発生に焦点を当てる。長谷は、上記の行動の循環を Bateson の分裂生成の概念に対応する、関係システムを破壊するポジティブ・フィードバックとし、矛盾状況からの撤退の禁止を一段上のレベルで関係システムを安定化させるネガティブ・フィードバックとして位置付ける。そして、二重拘束状況を下位のレベルからのポジティブ・フィードバックと上位のレベルでのネガティブ・フィードバックが釣り合った状態、つまり、システムが分裂し切れず変化の動きを内部にはらんだまま安定させられている状態であるとして定式化している。また、このモデルに基づき、治療的二重拘束、特に症状処方を関係システムのポジティブ・フィードバックの強化として解釈している。

長谷のモデルは、二重拘束を家族システム論のみならず、社会秩序の硬直的なあり方という広範な視点から社会学の問題として捉えるものであり、最終目標として社会現象への適用を目指している。

2.2 感情規則論と二重拘束

相互行為論的感情社会学と感情規則論

感情社会学は、従来社会学の伝統において非合理的なものとして退けられてきた感情を実践的・戦略的意味から積極的に主題とする社会学の一分野であり、主に次の 2 つの立場がある [22]。一つは、感情が観察可能な「実在」であることを前提とし、ある環境に置かれた人間がどのような感情をアウトプットするかの対応関係の理論化を主眼とする生理学的 (実証的) 立場であり、もう一つは、感情が生物学的に規定されることを前提とせず、社会的相互作用の中での感情生成の際の認知評価における文化性・歴史性を主眼とし、感情の社会からの規定状態や社会における機能を問題とする相互行為論的 (社会構成的) 立場である。

Hochschild を代表とする後者の相互行為論 (シンボリック・インタラクショニズム) の特徴は、自分の内的な状態を状況との関わりで認知的に評価して初めて感情が成立するという社会心理学的知見 (60 年代に提唱された感情の二要因説 [14]) を下敷に、認知的評価の歴史性や文化性を明らかにし、感情経験および感情表出の次元での社会性を問題とすることにある。そのための概念として Hochschild が提唱したのが「感情規則 (feeling rules)」である [7, 9, 8]。

行為者が自分の内的な状態やおかれた状況の解釈によって感情を作り上げるにしても、その解釈作業は主観的な恣意によってなされるのではなく、個別的な状況を越えた感情経験・感情表出の同型性や規則性が見い出され、さらにはそれが個々の文脈を越えて新たな文脈でも再生産される。感情規則は、我々が持つ感情に関わる権利や義務の感覚を、社会化により成員に伝達され社会統制によって安定する社会的に共有された解釈モデルとして表現する。感情規則の中には、「人を殺すのを喜んではいけない」というような普遍的なものもあれば、「近親者の喪失に対しては悲しみを表出すべき」などの規範的な期待一般もあり、さらには個人が担うジェンダー・年齢・職業などの相違や、民族・社会集団・階層などの文化的相違に基づいて異なり、フェミニズムの浸透による文化変容など社会のイデオロギー構造の変質に伴って歴史的にも変容する。

もう 1 つの重要な概念は「感情管理 (Emotion Management)」である。感情規則は人の感情を直接決定するわけではなく、他の諸々の要素とともに行為者によって解釈されることではじめて感情形成に関わる。そのような、人々が行なう感情形成の営み、特に感情の種類や程度を変化させようとする試みを、ホックシールドは感情管理と呼んでいる。それは、自分の内的な状態について、現在欠如している望ましい (感情規則に適合的な) 感情を喚起したり、現在経験している望ましくない (感情規則に不適合な) 感情を抑圧・消去する営みであり、この感情管理のために、悲しくなるために「悲しいことを思い出す」もしくは恐怖から逃れるために「大丈夫だと言い聞かせる」ような行為を「深層行為 (Deep Act)」と呼ぶ。

この感情規則と感情管理の概念は、様々な社会的感情現象を浮かび上がらせる。Hochschild 自身、フライト・アテンダント (スチュワーデス) が客に対して表面的にではなく「心から」優しくすることを企業から要求され、そのための感情管理の技術訓練を施される事実から、労働として感情管理を行なう「感情労働者」(もしくは「感情の商品化」) の概念を、労働疎外の観点から構築している [8]。

感情規則論と家族療法・二重拘束との関連

上記の感情規則論は、以下の点において家族療法および二重拘束と理論的親和性を持つと考えられる。

山田は、感情が「意志によってコントロール不能」なものと思われていることによる個人や人間関係、社会システムに対する様々な効果、特に、感情を感じることが制御不能である故に自己のアイデンティティを

構成することが、社会統制の手段として格好の材料となることを、近代社会における家族領域での女性に対する「愛情」としての感情規則(家族には愛情を感じなければならず、感じたら家族のために様々なことをするはずだという規則で、これが対価なしの自発的シャドウワーク及びそれに対する異議申し立ての封じ込めを導く)を例にとって指摘している[22]。また、二重拘束概念も「感じているもの」と「感じなければいけないもの」のギャップの問題につながるという示唆を行なっている([22], 第3章, p. 80)。

また、Foley[3]によれば、家族療法家のSatirは二重拘束を基本とした家族コミュニケーションのモデルにおいて、感情と家族における規則に焦点を当てている。この家族規則は家族の成員に感情の感じ方・表現の仕方を強制したり制約したりするものであり、家族システムが難局に立ち至るのは、規則が個人の成長に対してあまりにも制限的であるからであるとされる。Satirの治療目標は家族の成員の成熟であり、これを阻害する家族規則を顕在化させることで治療を行なう。感情の感じ方、表出の仕方に関する規則という点で、家族規則はHochschildの感情規則の家族版に対応するものと考えられ、感情規則論と家族療法の密接な関連を示すものである。[3]

3 感情規則と三者関係の認知的斉合性の理論による二重拘束の形式的表現

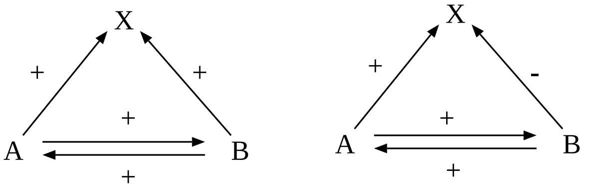
前章で紹介した二重拘束に対する長谷のシステムモデルおよび感情規則論に基づく山田の示唆は、やはりいずれも思弁のレベルに留まるものである。これら以外での二重拘束の定式化として、Koopmansは家族システムをオートポイエーシスとして定義し、二重拘束を自己言及プロセスとして記述している[11]。また、十島も家族システムをオートポイエーシスとして定式化し、上述の家族規則の生成過程をオートポイエーシスの作動として捉えている[29]。しかし、オートポイエーシス自体が未だ厳密な定式化をなされておらず、その概念としての難解さのため、いずれも概念としては抽象的なレベルに留まるものである。[4]

本章では、長谷と山田のアプローチを具体化する形で、感情規則の概念と、社会心理学において確立されている三者関係における認知的斉合性の理論、特にNewcomb[12]のA–B–XシステムとHeider[6]のP–O–Xシステムを用いて、二重拘束の関係システムとしての状態記述モデルを提案する。長谷川[18]もP–O–Xシステムを用いてリフレイムによる治療や家族システムにおける病者の発生を説明しているが、本研究では感情規則を含む複数の三者関係による記述を行なう。

3.1 三者関係における認知的斉合性の理論

社会心理学において、人間と物・概念を含む三者間の関係や態度に関する理論が1950年代に提案された。その中でも代表的であるのが、Newcomb[12]のA–B–XシステムとHeider[6]のP–O–Xシステムである。

A–B–Xシステムにおいては、ある人間(A)が別の人間(B)に人・物・概念(X)に関する情報を伝達する。つまり、このシステムはAのBおよびXに対する態度、BのAおよびXに対する態度から成り、各態度は正(+)および負(-)の2値を採る。A–B–Xシステム理論の主張は、態度A→B, A→X, B→X, B→Aの間に相互依存性が存在すること、より具体的には、Xに対するAとBの態度が対称かつA–B間の態度が双方正である場合、システムはBalance状態にあり(図1(a))、それ以外の場合はInbalance状態にある(図1(b))というものであり、さらに、Inbalace状態にあるシステムには何らかのBalance状態へ向かうダイナミクスが働くというものである。例えば、図1(b)の状態では、BがXへの態度を正に変更したり、AのBとXへの態度を負に変更するダイナミクスが働く。



(a) A Balanced State (b) An Inbalanced State

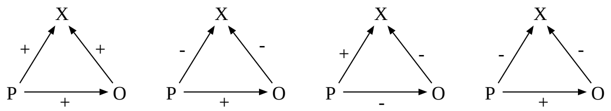
図1: A–B–XシステムにおけるBalance状態とInbalance状態の例

P–O–Xシステムは、ある人間(P)と他者(O)および人・物・概念(X)により構成される。問題となるのはPのOおよびXに対する関係の認知、つまりPからXへの関係、PからOへの関係、OからXへの関係の3つであり、各関係はやはり正(+)および負(-)の2値を採る。P–O–Xシステム理論の主張は、これら3つの関係の符合を掛け合わせた値が正の時に

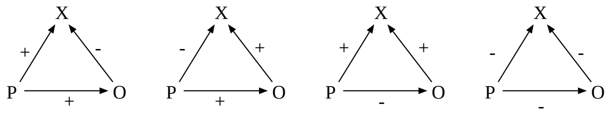
---

[3] 著者自身、ナラティブ・セラピーの基盤となるGergen社会構成主義[4, 20]と相互行為論的感情社会学との親和性を[25]において論じている。

[4] オートポイエーシスの解釈の難解さと定式化の可能性の問題については、著者自身[24]において議論している。



(a) Balanced Situations



(b) Inbalanced Situations

図 2: P–O–X システムにおける Balance 状態と Inbalance 状態

システムは Balance 状態にあり (図 2(a))、負の時は Inbalance 状態にある (図 2(b)) というものであり、さらに、システムが Inbalance 状態にある時、P はシステムが Balance 状態となるようにその関係認知を修正するというものである。

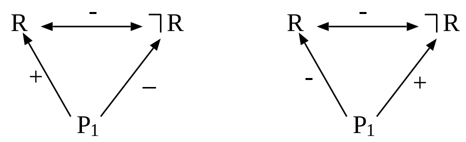
一つの注意点として、A–B–X システムは三者関係システムそのものの安定性を取り扱うものであるのに対して、P–O–X システムは三者関係の一角をなす個人の認知における安定性を取り扱うものである。

3.2 二重拘束の形式的表現モデルの提案

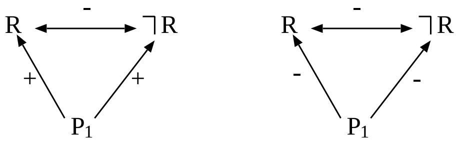
本章では、前章で示した A–B–X および P–O–X システムに感情規則を導入した複数の三者関係により山田の示唆を表現し、その関係の変動により長谷のモデルを具体化する。

ここでは、ある状況の下で特定の感情を喚起・抑制する感情規則としての R および同じ状況の下で相反する感情を喚起・抑制する感情規則 $\neg R$(例えば、$R =$「母親は家族を憎んではならない」と $\neg R =$「母親は家族を憎んでもかまわない」) を想定する。P_1 を二重拘束における加害者、P_2 を被害者とする。まず、P_1 と規則 R、$\neg R$ からなる P–O–X システムを考えると、R と $\neg R$ は相反するため負の関係で結ばれているとすれば、図 3 に示されるように、二つのバランス状態と二つのインバランス状態があり得る。インバランス状態は、P_1 は同じ状況で相反する感情を同時に喚起・抑制するように感情管理を行なうか、一切の感情管理を拒否する状態に相当する。

次に、さらに P_2 が加わった複数の三者関係からなる関係システムを考える。このシステムは、$P_1 - R - \neg R$、$P_1 - R - P_2$、$P_1 - \neg R - P_2$、$P_2 - R - \neg R$、$P_2 - R - P_1$、$P_2 - \neg R - P_1$ の 6 つの P–O–X システムと、$P_1 - P_2 - R$、$P_1 - P_2 - \neg R$ の 2 つの A–B–X システムから構成される。もし P_1 と規則 $R, \neg R$ からなる P–O–X システムが図 3(a) で示されるバランス状態にあれば、P_2 が規則 R、$\neg R$ に対して P_1 と同じ関係を持ち、かつ P_1 と P_2 のそれぞれに対する関係が正であれば (図 4 上図)、全ての三者関係システムはバランス状態で安定している。つまり、P_1 が相反する感情規則に対して斉合性のとれた関係を持っていれば、P_2 は同じ斉合性のとれた関係を持ち P_1 と正の関係を互いに持つことで関係システムは安定する。また、P_2 が規則に対して P_1 と逆の意味で斉合性のとれた関係を持てば、P_1 と P_2 が反目し合うことで 6 つの P–O–X システムは全て安定する (図 4 下図)。



(a) Balaced Situations



(b) Inbalaced Situations

図 3: 感情規則と認知者からなる可能な三者関係

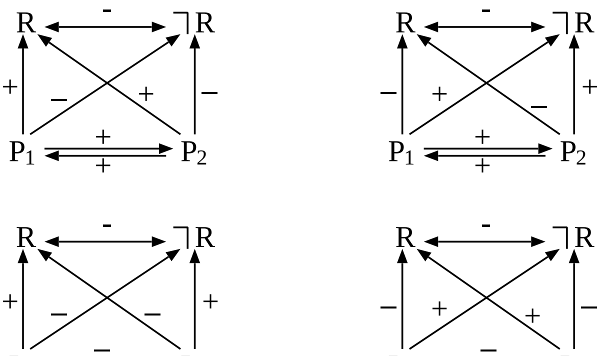


図 4: P_1 が規則に対して斉合している場合の安定状態

問題となるのは、P_1 が図 3(b) に示されるインバランス状態、つまり相反する感情規則に対して不斉合な関係を持っている場合である。表 1 に示すように、P_2 がとり得る R、$\neg R$、P_1 に対する関係は 8 種類存在するが、この場合どのような関係を選択しても、P_2 を含む全ての P–O–X システム P_2–R–$\neg R$、P_2–P_1–R、P_2–

表 1: P_1 が相反する感情規則に関して不齐合な関係を持つ場合の全ての可能な関係における P–O–X システムのバランスの度合

			$P_1 \to R = +$ and $P_1 \to \neg R = +$			$P_1 \to R = -$ and $P_1 \to \neg R = -$		
$P_2 \to P_1$	$P_2 \to R$	$P_2 \to \neg R$	P_2–R–$\neg R$	P_2–P_1–R	P_2–P_1–$\neg R$	P_2–R–$\neg R$	P_2–P_1–R	P_2–P_1–$\neg R$
$+$	$+$	$+$	$-$	$+$	$+$	$-$	$-$	$-$
$+$	$+$	$-$	$+$	$+$	$-$	$+$	$-$	$+$
$+$	$-$	$+$	$+$	$-$	$+$	$+$	$+$	$-$
$+$	$-$	$-$	$-$	$-$	$-$	$-$	$+$	$+$
$-$	$+$	$+$	$-$	$-$	$-$	$-$	$+$	$+$
$-$	$+$	$-$	$+$	$-$	$+$	$+$	$+$	$-$
$-$	$-$	$+$	$+$	$+$	$-$	$+$	$-$	$+$
$-$	$-$	$-$	$-$	$+$	$+$	$-$	$-$	$-$

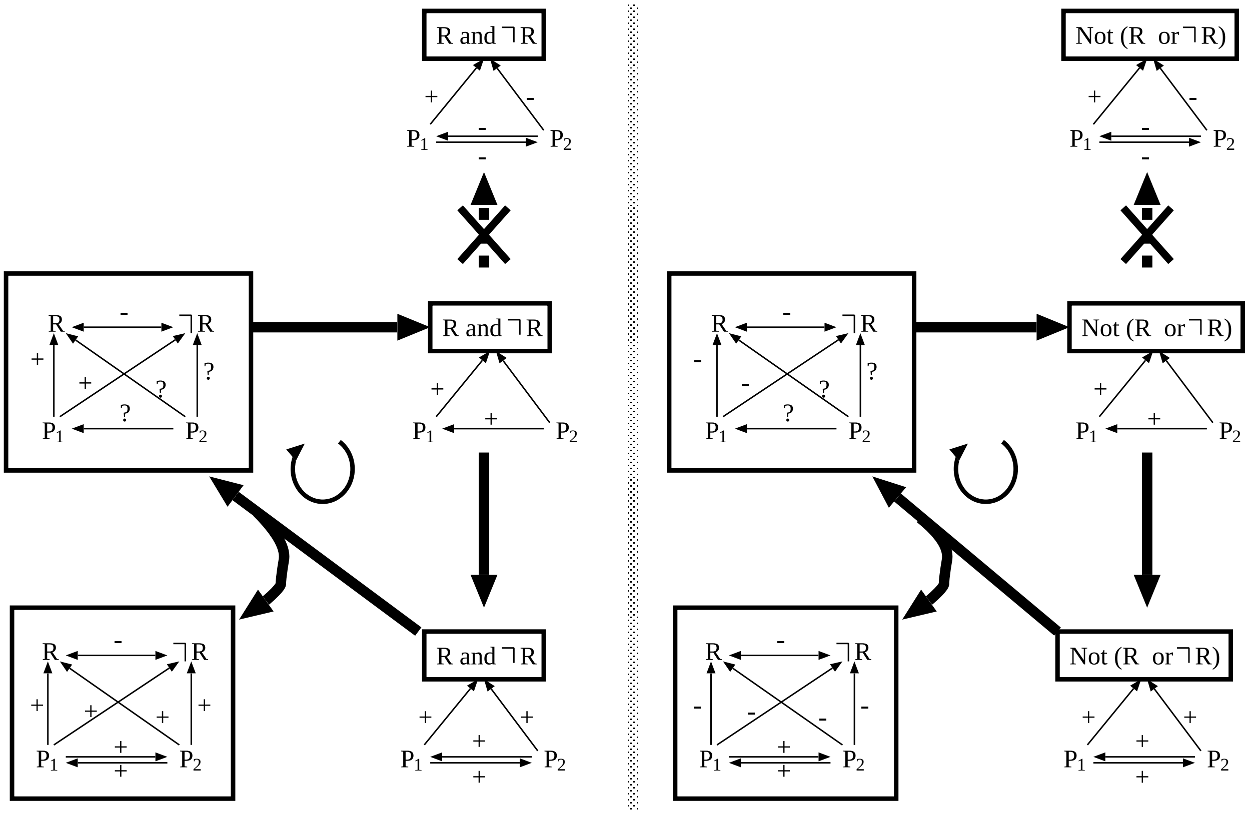


図 5: 被害者 P_2 が二重拘束状況に至る過程のモデル (左ブロック図: P_1 が相反する感情規則の両方に従う場合、右ブロック図: P_1 が相反する感情規則の両方とも拒否する場合)

P_1–$\neg R$ が同時にバランス状態になることはない。この状態が、二重拘束における相矛盾するメッセージの存在であり、長谷のシステムモデルにおけるポジティブ・フィードバック、分裂生成の状態に対応すると考えられる。

図 5 に、本研究で提案の二重拘束の形式的表現モデルを示す。まず、このモデルでは、前述の P_1 の規則に対する不齐合 (図 5 左右各ブロック図左上部の関係) から生じる P_2 の P–O–X システムの不安定状態としてのポジティブ・フィードバックが存在する。次に、この規則不齐合による不安定状態そのものが概念化された上位のシステムを考える。この上位のシステムは、概念化された不安定状態と P_1、P_2 からなる三者関係のシステムによって表現される。図 5 の左ブロック図、つまり P_1 が相反する感情規則の両方に従う場合は、不安定状態は相反する規則の同時遵守という形で概念化されるとし、図 5 の右ブロック図、つまり P_1 が相反する感情規則の両方を拒否する場合は、不安定状態は

相反する規則のいずれか一方の遵守の拒否というという形で概念化されるとする。この上位レベルでの三者関係システムにおいて、P_1 は矛盾からの撤退禁止メッセージによって不安定状態に対して正の関係を持っているとする。この時、もし P_2 が不安定状態と P_1 に対して負の関係を持てば、A–B–X システムと P–O–X システムの安定化作用により P_1 と反目する形で分裂生成が成し遂げられる。しかし、二重拘束において P_2 は P_1 と抜き差しならない関係にあるという長谷のモデルを考慮すれば、P_1 は P_2 に対して正の関係を持たざるを得ない。従って、やはり A–B–X および P–O–X システムの安定化作用により、図 5 左右ブロック図の右下の状態、つまり下位レベルのシステムにおける不安定状態に対して正の関係をとる形となる。これは、長谷のモデルにおけるネガティブ・フィードバックに対応する。また、下位レベルの関係システムからのポジティブ・フィードバックと上位レベルの関係システムのネガティブ・フィードバックがの不安定状態の循環のループは、二重拘束の条件における経験の繰り返しによる状況認識の慣習化を表現するものである。

4 本モデルからの含意

特定の仮定を置くことで、前章で提案した二重拘束の形式的表現モデルから以下の含意を導くことが出来る。

4.1 二重拘束状況の伝搬

前章で提案したモデルにおいては、P_2 は下位のレベルの関係システムではどのような関係を選択しても不斉合を抱え込むが、上位のレベルの関係システムでは P_1 と正の関係を持っている。従って、上記の循環ループによる経験の繰り返しから、P_2 は下位レベルでの関係の選択を表 1 に示される 8 種類のうち P_1 に対して正の関係を持つ 4 種類に限定する可能性が高いと考えられる。

ここで、P_2 が P_1 を含まない三角形 P_2–R–$\neg R$ のバランス、つまり規則に対する斉合性よりも P_1 を含む三角形 P_2–P_1–R、P_2–P_1–$\neg R$ のバランス、つまり他者との関係における斉合性を優先すると仮定する。この時、表 1 に示すように、P_2 にとって最も斉合性のとれた状態は P_1 と同じ、つまり相反する感情規則に対する不斉合を抱え込む状態 (図 5 左右ブロック図の左下の状態) である。この状態は、P_2 が P_1 と同じ過程で他者を感情規則に対する不斉合に導く可能性、つまり二重拘束に捕らわれた者は他者を二重拘束に陥らせる可能性を示唆するものであり、お互いのパラドキシカルな行動を誘発する循環運動に対応するものと解釈出来る [23, 16]。

4.2 3 人以上の関係システムの記述

これまで扱ってきた三者関係は、加害者 P_1 と被害者 P_2 という二者と感情規則からなるシステムであったが、この記述法自体は三人以上の人間からなるシステムにも当然適用可能である。ここでは、以下のような三人からなる関係システムを考察する。

P_1 と P_2 および感情規則 R と $\neg R$ からなる関係システムが安定しているすれば、これまでの議論により以下の 3 つの場合が考えられる。

1. P_1 と P_2 が相反する規則に対して同じ斉合性を持つ場合 (図 4 上図の状態)
2. P_1 と P_2 が相反する規則に対して異なる斉合性を持つ場合 (図 4 下図の状態)
3. P_1 と P_2 が二重拘束状況に捕らわれている場合 (図 5 左右ブロック図の左下の状態)

今、上述の安定状態に P_3 が加わった関係システムを考える。1 の場合、言わば P_1 と P_2 が連合している状態であり、図 6 左上図に示されるように規則に対して P_1 と P_2 と同様の斉合性を持ち、かつ三者が完全に連合する状態と、右上図に示されるように規則に対して逆の斉合性を持ち、P_1 と P_2 の連合に反目する状態において、全ての P–O–X システムが安定する。2 の場合も同様に、1 の場合の連合が P_1 と P_3(図 6 左下図)

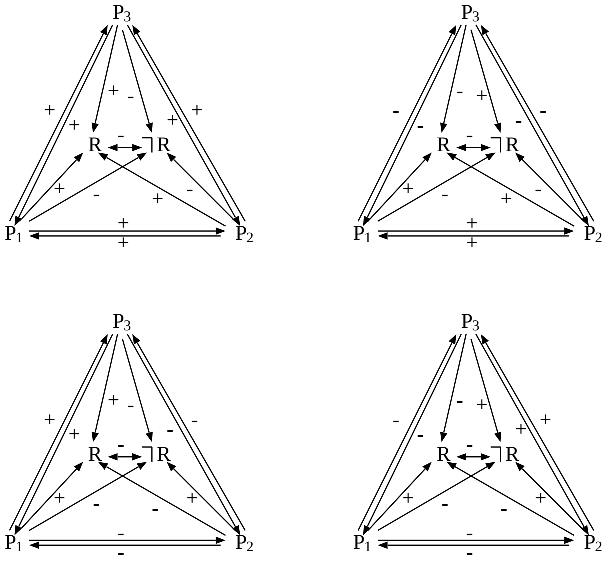


図 6: 3 人からなる完全に安定した関係システム

もしくは P_2 と P_3(図6右下図) に置き換わった形の状態において、全ての P–O–X システムが安定する。しかし、P_1 と P_2 を両親、P_3 を幼い子供として想定した場合、P_3 が P_1 や P_2 に対して負の関係を持つことは考えにくい。1の場合では完全連合が安定状態であるため、両親連合への反目としての安定状態は回避され得る。

問題となるのは2の場合と3の場合である。2の場合の安定状態は両親のいずれか一方との連合であり、両親いずれかに対して負の関係を持たざるをえない。また、親の一方が子供と連合を組もうとするならば、P_1–P_3 間および P_2–P_3 間の関係は互いに正となる。この時、図7左図に示されるように、A–B–X システムの安定化により P_3 は相反する規則に対して不斉合を抱え込む状態となる可能性がある。この場合、P_3 は不安定な P–O–X システムを5つ、P_1 と P_2 はそれぞれ3つ抱え込んでいる。この状態は二重拘束とは異なるが、両親が家族規則に対して合意がとれていない場合、二重拘束と同様の規則不斉合を子供が抱え込む可能性を示唆している。

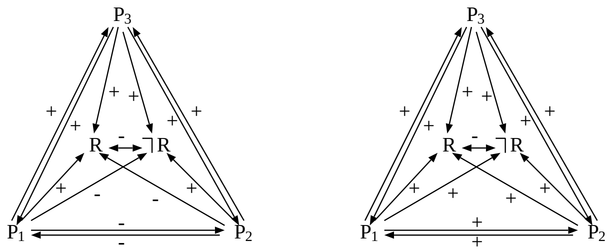


図 7: 3人からなる部分的に不安定な関係システム

さらに3の場合、両親が規則に対する不斉合を共有する形で連合しているため、P_3 は前章で示した二重拘束の過程により、図7左図に示されるように同じ不斉合を共有する形で両親と連合する可能性が高い。この場合、各人が抱える不安定な P–O–X システムは、R–$\neg R$ を含む関係システムだけであり、それ以外の P–O–X システムは安定している。また、図7右図と図6右上図を比較すると、P_1–P_2–P_3 の A–B–X システムはいずれも安定しているが、二重拘束の場合は各人の相反する規則に対する不斉合によってそれが達成されていると考えられる。このことは、家族システムの安定性は家族規則にまで立ち入らなければ解明出来ないことを示唆している。さらに、図5に示される二者の場合の不斉合による二重拘束では、被害者 P_2 が保持する3つの P–O–X システムのうち不安定なものは規則不斉合による1つ、安定なものは2つという内訳であるが、図7右図の P_3 においては7つの P–O–X システムが存在し、不安定なものは規則不斉合による1つ、安定なもの6つという内訳となっている。もし複数の P–O–X システムの安定が個人の心理において加算的に影響すると仮定すれば、このことは二者による二重拘束よりも三者による二重拘束のほうが安定度が高いことを示唆している。

5 おわりに

本研究では、二重拘束を関係システムにおけるポジティブ・ネガティブのフィードバックの安定状態として捉える長谷のアプローチ、および Hochschild の感情規則論を基に二重拘束を感情のギャップとして捉える山田の示唆を、社会心理学の三者関係における認知的斉合性の理論を用いて形式的に表現するモデルの提案を行なった。結果として、状況の慣習化により被害者が家族内の感情規則に対して加害者と同じ不斉合を抱え込む過程を形式的に表現し、二重拘束に囚われた者が他者を二重拘束に陥らせる現象の可能性を実験・事例観察とは異なる方向から示唆した。また、二重拘束において加害者が複数の場合の影響の違いについても、その可能性を形式的な推論により示唆した。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について考察する。まず第1に、本研究で提案の二重拘束のモデルは既存の社会学的思考実験的モデルを基に構成された形式的なものである。そのため、実証主義的な立場に立つならば、実際の二重拘束状況において相反する感情規則を伴う複数の不安定な三者関係が実際に存在するか否かを、観察事例を通して検証する必要がある。その上で、本モデルのどの部分が検証・反証可能であり、そのためにはどのような証拠および証拠からの推論が妥当であるかを (Grünbaum が古典的フロイド精神分析に対して [5] において行なったような形で) 科学哲学の文脈で明らかにする必要がある。

第2に、家族内コミュニケーションの現実的想定を考慮すれば、本モデル自体には拡張の余地がある。まず、本モデルでは、ある人物が他者に対して実際に採っている態度・関係と、その他者がその人物から受けていると認知する態度・関係を同一のものとして扱っているが、より現実的な想定を形式化するのであれば、この2つは区別する必要がある。また、本モデルの関係ダイナミクスにおいては、各態度が1つの値に収束した静的安定状態に至る過程を二重拘束状況として考えているが、実際の家族内コミュニケーションではむしろ一定のコミュニケーションパターンの繰り返しとしての動的状態が観察される [16]。つまり、二重拘束をコミュニケーションパターンの動的安定状態として

捉える枠組が必要である。さらに、より現実的な想定を行なうのであれば、態度・関係の値を正負の2値ではなく、Osgood & Tannenbaum[13] が扱っているような連続の態度値による三者関係の変容理論を導入して、モデルを拡張する必要がある。

第3に、最も重要な点であるが、実証主義的立場であれ社会構成主義的な立場であれ、本モデルが治療実践の上でどのような寄与が出来るかを明らかにするために、家族療法の適用場面が本モデルでどの程度表現可能であるかを臨床家の協力の下に確認し、新たな治療関係・態度のあり方にまで言及可能かどうかを模索する必要がある。しかし、その上で問題が2つ存在する。まず、現代社会は感情に関する言説に対して非常に敏感であるという感情規則論の知見 [22, 21] を鑑みれば、感情規則を用いたモデルに基づいて治療論に関する言説を組み立てる際にも、当然慎重さが求められる。またそれ以上に、本モデルは社会心理学的ダイナミクスを用いた機械論的システムであり、そこにはナラティブ・セラピーが求めるような治療者とクライアントの共同の語りによる意味づけの過程は表現されていない。ナラティブ・アプローチを含む治療者–クライアント関係を本モデルで表現することが可能であるとしても、そのような表現自体が、例えばフェミニスト・セラピストである平川がシステム論に対して感じている冷たさ [28] を強調するだけの可能性も、現状では否定出来ない。この2点は、本モデルの今後の課題として早急に考察する必要がある。

付記

本稿は、既発表の文献 [26, 27] に大幅な加筆・修正を加えたものである。

参考文献

[1] G. Bateson. *Steps to an Ecology of Mind.* Harper & Row, 1972. (邦訳: 佐藤良明 (訳), 精神の生態学, 思索社, 1990).

[2] L. Ciompi. *Affektlogik.* Klett–Cotta, 1982. (邦訳: 松本雅彦・井上有史・菅原圭悟 (翻訳), 感情論理, 学樹書院, 1994).

[3] V. D. Foley. *An Introduction to Family Therapy.* Grune & Stratton, New York, San Francisco, London, 2nd edition, 1986. (邦訳: 藤縄 昭・新宮一成・福山和女 (1993). 家族療法 – 初心者のために. 創元社).

[4] K. J. Gergen. *Toward Transformation in Social Knowledge.* Sage Publications, London, 1994. (邦訳: 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 (監訳), もう一つの社会心理学, ナカニシヤ出版, 1998).

[5] A. Grünbaum. *The Foundations of Psychoanalysis: A Philosophical Critique.* University of California Press, 1984. (邦訳 村田純一 他 (1996). 精神分析の基礎 – 科学哲学からの批判. 産業図書).

[6] F. Heider. *The Psychology of Interpersonal Relations.* John Wiley & Sons, 1958. (邦訳 :大橋正夫 (1978). 対人関係の心理学. 誠信書房).

[7] A. R. Hochschild. Emotion Work, Feeling Rules and Social Structure. *American Journal of Sociology*, Vol. 85, pp. 551–575, 1979.

[8] A. R. Hochschild. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling.* University of California Press, 1983. (邦訳: 石川 准・室伏亜希 (2000). 管理される心 – 感情が商品になるとき. 世界思想社).

[9] A. R. Hochschild. Ideology and Emotion Management: A Perspective and Path for Future Research. In T. D. Kemper, editor, *Research Agendas in the Sociology of Emotions*, pp. 117–142. State University of New York Press, 1990.

[10] M. Koopmans. Schizophrenia and the Family: Double Bind Theory Revisited. *Dynamical Psychology*, 1997. (electric journal, http://goertzel.org/dynapsyc/).

[11] M. Koopmans. Schizophrenia and the Family II: Paradox and Absurdity in Human Communication Reconsiderd. *Dynamical Psychology*, 1998. (electric journal, http://goertzel.org/dynapsyc/).

[12] T. M. Newcomb. An approach to the study of communicative acts. *Psychological Review*, Vol. 60, No. 6, pp. 393–404, 1953.

[13] C. E. Osgood and P. H. Tannenbaum. The principle of congruity in the prediction of attitude change. *Psychological Review*, Vol. 62, No. 1, pp. 42–55, 1955.

[14] S. Schachter and J. E. Singer. Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, Vol. 69, pp. 379–399, 1962.

[15] A. Sokal and J. Bricmont. *Fashonable Nonsense: Postmodern Intellectuals' Abuse of Science*. Brockman, New York, 1998. (邦訳: 田崎晴明・大野克嗣・堀 茂樹 (2000). 「知」の欺瞞- ポストモダン思想における科学の濫用. 岩波書店).

[16] P. Watzlawick, J. B. Bavelas, and D. D. Jackson. *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. W.W.Norton & Company, 1967. (邦訳 :山本和郎・尾川丈一 (1998). 人間コミュニケーションの語用論- 相互作用パターン、病理とパラドックスの研究. 二瓶社).

[17] P. Watzlawick, J. H. Weakland, and R. Fisch. *CHANGE — Principles of Problem Formation and Problem Resolution*. W.W.Norton & Company, 1974. (邦訳 :長谷川啓三 (1992). 変化の原理 – 問題の形成と解決. 法政大学出版局).

[18] 長谷川啓三. 家族内パラドックス – 逆説と構成主義. 彩古書房, 1987.

[19] 高坂健二. 社会学におけるフォーマル・セオリー – 階層イメージに関する FK モデル. ハーベスト社, 2000.

[20] 杉万俊夫, 深尾誠. 実証から実践へ – ガーゲンの社会心理学. 小森康永, 野口裕二, 野村直樹 (編), ナラティヴ・セラピーの世界, 第 3 章, pp. 55–71. 日本評論社, 1999.

[21] 森真一. 自己コントロールの檻 – 感情マネジメント社会の現実. 講談社, 2000.

[22] 岡原正幸, 山田昌弘, 安川一, 石川准. 感情の社会学 – エモーション・コンシャスな時代. 世界思想社, 1997.

[23] 長谷正人. ダブル・バインドへのシステム論的アプローチ. 社会学評論, Vol. 40, pp. 311–324, 1989.

[24] 野村竜也. オートポイエーシスの数理的記述に関する展望. 実験社会心理学研究, Vol. 40, No. 1, pp. 73–86, 2000.

[25] 野村竜也. 計算論的感情モデルとグループ・ダイナミックス. 心理学評論, Vol. 43, No. 3, pp. 411–426, 2000.

[26] 野村竜也, 林勲, 青木博明, 前田利之. 感情規則と三者関係の認知的斉合性を用いた二重拘束のモデル. 日本グループ・ダイナミックス学会第 48 回大会論文集, pp. 104–105, 2000.

[27] 野村竜也, 林勲, 青木博明, 前田利之. 感情規則による二重拘束の形式的記述. 数理社会学会第 31 回大会論文集, pp. 16–19, 2001.

[28] 平川和子. フェミニスト・セラピー – 共感と安全を保障するつながり. 小森康永, 野口裕二, 野村直樹 (編), ナラティヴ・セラピーの世界, 第 5 章, pp. 93–111. 日本評論社, 1999.

[29] 十島雍蔵. 家族システム援助論. ナカニシヤ出版, 2001.